

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 4 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23330276

研究課題名(和文)子どものコミュニケーション・チェックリスト日本版の標準化と日英語用障害などの比較

研究課題名(英文)Standardization of Japanese version of Children's Communication Checklist-2

研究代表者

大井 学(Oi, Manabu)

金沢大学・学校教育系・教授

研究者番号：70116911

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,200,000円、(間接経費) 3,660,000円

研究成果の概要(和文)：全国の13の地域の小中学校・幼稚園・保育所から、26000名を超える回答を得た。粗点に男女差があり、評価点は男女別に算出した。クロンバック係数は.50から.77であった。「ステレオタイプ化された言語」はASD群のみで問題がみられ、「発話の不適切な開始」「文脈の利用」「非言語的コミュニケーション」はASD群、ADHD群ともに問題がみられた。「非言語的コミュニケーション」はSLIよりASDで問題が大きかった。「文脈の利用」と「ステレオタイプ化された言語」ではSLIとASDの有意差はみられなかった。

研究成果の概要(英文)：More than 26000 parents of children ranging in age 3 to 15 years participated in C-CC-2 survey all around Japan. Cronbach's alpha ranged from .50 to .77 in the subscales. Girls performed better than boys. Standard score was calculated for each.

Stereotyped speech was more frequent in ASD children than those with ADHD. No intergroup difference in appropriate initiation of utterance, use of context, and nonverbal communication was seen between ASD and ADHD. When compare ASD with SLI, nonverbal communication distinguished the two groups while use of context and stereotyped speech did not produce intergroup difference.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・特別支援教育

キーワード：コミュニケーション チェックリスト 言語障害 自閉症 ADHD

## 1. 研究開始当初の背景

CCC-2 ( Bishop,2003 ) は CCC ( Bishop,1998 ) の改訂版である。旧版から一貫して英語の幼児から青年前期までの子どものコミュニケーション障害を、語用論の側面に重点を置きつつ、統語、形態、意味、音韻の各言語領域および非言語コミュニケーションと対人関係並びに興味の偏りにまたがる、コミュニケーションの多面的・総合的な評価尺度として

の有用性を、実践的・研究的に如何なく発揮してきた。日本語版標準化は日本の「気になる」子どもへの支援と研究の大幅な発展の契機となる。CCC-2 日本語版の確立にはいくつか検討を要する課題がある。英語を右から左に移したわけではなく、文法・音韻・意味項目は日本語に即して変更した。語用能力関連の項目も可能な限り日本語の伝達習慣に即したものに改訂した。

研究代表者はすでに挑戦萌芽研究 (H19-21、研究代表者・大井 学)を通じて、また厚生労働省こころの健康科学研究事業「子どもの発達アセスメントの有用性の調査」(研究代表者・神尾陽子)との連携により、CCC-2 日本語版を約 27000 名余の子どもたちの保護者(一部は担任教諭)を対象に実施し、標準化作業用データセットを整備した。

## 2. 研究の目的

1) 定型発達群について CCC-2 日本語版の基本統計量(下位尺度の内的整合性 係数など)を得る。

2) 臨床群(自閉症、ADHD、SLI)のデータを得て、定型発達群との対照、診断分類間の異同を検討する。

3) CCC-2 日本語版の標準化の一環として、子どもと接する社会的文脈や関係性の異なる評価者、すなわち、養育者と保育者(幼稚園教諭および保育士)による評価の比較検討を行う。

4) 日英バイリンガル児童の日本語と英語での CCC-2 評価の異同を検討する。

## 3. 研究の方法

研究 1 定型発達群 3 歳から 15 歳までの約 27000 名を対象に調査を行った。

研究 2 小学生の SLI 群(21 名)、TD 群(32 名)、ASD 群(60 名)を対象に調査を行った。

研究 3 小学生の ASD 群(12 名)、ADHD 群(12 名)、TD 群(35 名)を対象に調査を行った。

研究 4 幼稚園、保育所に在籍する幼児の養育者(母親)60 名と保育者 60 名に調査を行った。

研究 5 日本語英語両言語の並行教育を行う合衆国の 1 つの小学校に在籍する 50 名を対象に調査を行った。

## 4. 研究成果

研究 1 CCC-2 検査項目における内的整合性に日本語版の特徴がみられる。日本語版 CCC-2 においては、その半数の下位領域でクローンバックの 係数が .60 前後に留まり、

Geurts & Embrechts (2008) の指摘のように日本語版においても下位領域間でその値にある程度の幅が確認された。UK 版と Québec 版を基準とすると、日本語版において目立って低い 係数を示したのは A 領域と B 領域である。そのため、日本語版 CCC-2 は語用的側面およびそれに関わる社会的側面に焦点をあてた下位領域群に比べ、特に音声および文法領域といった言語構造に関する評価においてはその運用に注意を払う必要があることが示唆された。CCC-2 において、自閉性傾向を反映する I、J 領域など、男女差が示唆されている障害と関連した領域から一定の差異を検出できたことは興味深く、標本サイズの大きさを念頭においても、男女間で一貫した平均値ならびに標準偏差の差が明らかなることは留意すべき点である。原典である UK 版および他国の翻訳版では、CCC-2 での評価において男女差は論じられていない。CCC2 を利用した研究ならびに実践の両面において男女の違いを考慮することは日本語版の特徴のひとつとなる可能性がある。研究用として予備的な日本語版 CCC-2 の標準値を報告した。特定領域での内的整合性の低さや年齢群間での標準値の変動の小ささといった留意点があるものの、UK 版に近い年齢分布からなる標準化サンプルから作成された日本語版は加齢とコミュニケーションの困難度評価の関連を踏まえた、UK 版の特徴を再現した検査となった。

研究 2 分散分析と多重比較の結果、SLI 群は「音声」「文法」「意味」「首尾一貫性」「ステレオタイプ化された言語」「文脈の利用」「非言語的コミュニケーション」「興味関心」の下位項目で TD 群より平均値が有意に高かった。また、ASD 群よりも「音声」は有意に高く、「発話の不適切な開始」「非言語的コミュニケーション」「社会的関係」は有意に低かった。語用関連項目のうち「発話の不適切な開始」は ASD のみで問題がみられ、「非言語的コミュニケーション」は SLI より ASD で問題が大きかった。これらは相手に話しかけるタイミング、表情の理解や適切な距離感など、音声言語使用の背景をなす社会的認知に関係する。一方、「文脈の利用」と「ステレオタイプ化された言語」では SLI と ASD の有意差はみられなかった。これらは音声言語使用そのものに関わる。これまで語用の障害は ASD の特徴と考えられてきたが、その一部は SLI においてもみられることが示唆された

研究 3 分散分析と多重比較の結果、ASD 群は「音声」「文法」「意味」「首尾一貫性」「発話の不適切な開始」「ステレオタイプ化された言語」「文脈の利用」「非言語的コミュニケーション」「社会的関係」「興味関心」の 10 領域全てにおいて TD 群より有意に平均値が高く、また ADHD 群に比べ「音声」「興味関心」の領域で有意に平均値が高かった。そして、

ADHD 群は「音声」「文法」「意味」「ステレオタイプ化された言語」以外の領域で TD 児に比べ有意に平均値が高かった。

CCC-2 の語用に関連する下位項目のうち「ステレオタイプ化された言語」は ASD 群のみで問題がみられ、「発話の不適切な開始」「文脈の利用」「非言語的コミュニケーション」は ASD 群、ADHD 群ともに問題がみられた。語用の障害は ASD 特有の問題であると考えられてきたが、本研究の結果より、ASD のみならず、ASD ほど顕著ではないにせよ、ASD を伴わない ADHD においても幅広くみられる可能性が示唆された。

研究 4 結果からは、両者間では評価に違いがあり、特に「意味」、「非言語コミュニケーション」、「社会的関係」の領域については、養育者と保育者で差が現れやすいことが明らかになった。集団の中の幼児を評価するのか家庭での幼児を評価するのかという社会的文脈の差が現れることが推察された。

対象児の年齢を考慮した結果からは、幼児の年齢による違いは見られたものの、年齢と評価者の交互作用は見られなかった。加齢に伴いほとんどの領域では困難さの得点が軽減される傾向が示されたが、「非言語コミュニケーション」、「社会的関係」、「興味関心」の領域に関しては、幼児の年齢に関係なく一貫した評価を受けることが示唆された。

今後は、子どもの診断に影響があるかどうか、「言語的側面」、「語用的側面」、「自閉性障害的側面」の臨床群を用いた研究を行うことが課題である。また、発達障害児の養育者と保育者間の評価について比較調査を行い、本研究の結果と合わせて評価者による CCC-2 日本語版の異同を検討することを課題としたい。前述したとおり、評価者の不安感や子育て経験、保育経験などがどのように影響するかについても今後検討する必要がある。さらに、CCC-2 日本語版が臨床的アセスメントに止まらず、保育者が子どものコミュニケーション行動を理解し支援に生かすための実践的ツールとして応用できないかという点について検討することも今後の課題としたい。

研究 5 日英バイリンガル児童の家族からは両言語での CCC-2 の回答が得られず、家族によって日本語を選択したケースと英語を選択したケースとに分かれたため、所期の目的は達成されなかった。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2 件)

- 槻館尚武・大井学・榎藤桂子・神尾陽子 (2014) Children's Communication Checklist-2 日本語版の標準化の試み: 標準化得点の検討、コミュニケーション障害学第 31 巻 査読有 印刷中
- 綾野鈴子・榎藤桂子・槻館尚武・大井

学・田中早苗 (2014) CCC-2 日本語版による幼児のコミュニケーションの養育者と保育者の評定者間比較、コミュニケーション障害学第 31 巻 査読有 印刷中

〔学会発表〕(計 7 件)

- 齋藤仁美・藤野博・大井学 (2014) CCC-2 による通級児童のコミュニケーションの実態調査(2): ASD と ADHD における語用の特徴、日本コミュニケーション障害学会第 40 回学術講演会 2013 年 5 月 10 日金沢大学・石川県
- 藤野博・齋藤仁美・大井学 (2014) CCC-2 による通級児童のコミュニケーションの実態調査(1): 特異的言語発達障害 (SLI) における語用の特徴、第 40 回日本コミュニケーション障害学会学術講演会 2013 年 5 月 11 日金沢大学・石川県
- 大井学・槻館尚武・榎藤桂子 (2013) Children's Communication Checklist-2 日本語版検査項目における内的整合性の検討、日本コミュニケーション障害学会第 39 回学術講演会 2013 年 7 月 20 日上智大学・東京都
- 綾野鈴子・榎藤桂子・槻館尚武・大井学・田中早苗 (2013) CCC-2 日本語版による幼児のコミュニケーションの養育者と保育者の評定者間比較、日本コミュニケーション障害学会第 39 回学術講演会 2013 年 7 月 21 日上智大学・東京都
- 大井学・田中早苗・榎藤桂子・綾野鈴子・長谷川千秋 (2012) 子どものコミュニケーションチェックリスト第二版 (CCC-2) 日本語版の標準化: 定型就学前児、日本コミュニケーション障害学会第 38 回学術講演会 2012 年 5 月 12 日県立広島大学・広島県
- Fujino, H. & Oi, M. (2012) VALIDITY OF CCC-2 FOR IDENTIFYING LANGUAGE/COMMUNICATION PROBLEM OF JAPANESE CHILDREN WITH AUTISM SPECTRUM DISORDER. International Clinical Phonetics & Linguistics Association 2012. 2012 年 6 月 28 日 University College of Cork, Ireland
- 大井学・藤野博・田中早苗・長谷川千秋 (2011) 子どものコミュニケーションチェックリスト (CCC-2) 日本語版の標準化: 定型小中学生、日本コミュニケーション障害学会第 37 回学術講演会 2011 年 5 月 28 日長野農協会館・長野県

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

取得状況 (計 0 件)

〔その他〕  
ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

大井 学 (Oi Manabu)  
金沢大学・学校教育系・教授  
研究者番号：70116911

### (2) 研究分担者

藤野 博 (Fujino Hiroshi)  
東京学芸大学・教育学部・教授  
研究者番号：00248270

権藤 桂子 (Gondou Keiko)  
共立女子大学・家政学部・教授  
研究者番号：90299967

槻館 尚武 (Tukidate Naotake)  
国際基督教大学・教育研究所・研究員  
研究者番号：80512475

### (3) 連携研究者

土屋 賢治 (Tuchiya Kenji)  
浜松医科大学・子どものこころの発達研究  
センター・准教授  
研究者番号：20362189

谷池 雅子 (Taniike Masako)  
大阪大学・連合大学院小児発達学研究科・  
教授  
研究者番号：30263289

棟居 俊夫 (Munesue Toshio)  
金沢大学・子どものこころの発達研究セン  
ター・教授  
研究者番号：50293353

小山 智典 (Koyama Tomonori)  
信州大学・医学部・講師  
研究者番号：60469989